



Newspaper in Education

NIE ニュース

エヌ・アイ・イー

第106号
2025.7.15

●特集・NIEで育む防災意識▶1~3 ●新聞とメディアリテラシー▶4 ●新聞の「今」——「デザインの中で分かりやすく」▶5 ●NIEアドバイザー紹介／フラッシュニュース▶6~7 ●〈NIEでいきいき〉〈NIEあれこれ〉▶8

©2025年 日本新聞協会

編集・発行 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp
〒100-8543 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル [https://nie.jp] [https://www.facebook.com/Nie47]

特集 NIEで育む防災意識

災害大国だからこそ防災意識を高め、有事の流言にも惑わされないリテラシーを身に付けたい。防災と情報をテーマに今夏開催されるNIE全国大会神戸大会実行委員長から大会への思いを、小中学校の先生から実践報告を寄稿いただいた。

第30回NIE全国大会神戸大会は7月31、8月1の2日間、神戸市で開催される。大会スローガンは「時代を読み解き、いのちを守るNIE」である。

教訓を次代につなぐ

今年には阪神・淡路大震災から30年、戦後80年、インターネットが本格的に産声を上げて30年にあたる。

地震などの自然災害が相次ぐなか、大震災の教訓を語り継ぎ、次代につなぐこと、ウクライナや中東の戦火が今なお続く状況で、平和の尊さを伝えること、情報過多の時代、正確な情報を収集することの大切さを伝える



兵庫県NIE推進協議会会長
NIE全国大会神戸大会実行委員長
竹内 弘明

こと——デジタルネイティブ世代の子どもたちが、これからの先行き不透明な時代を生き抜いていく力を育むために、新聞ができることは何かを考える。

初日の開会式は世界的指揮者の佐渡裕氏とスーパーキッズ・オーケストラによる演奏で幕を開け、続く芥川賞作家の小川洋子氏による記念講演では、「言葉は人をつなぐ」をテーマに話を聞く。パネル討議では、ジャーナリストの池上彰氏の司会で「情報で、いのちを守る」をテーマに議論を深める。

会場には震災からの30年を振り返るパネルや「新聞女」こと西沢みゆき氏制作の新聞アートなどを展示する。

2日目の公開授業や実践発表は、県内の小・中・高・特別支援学校から、防災教育、平和教

育、主権者教育、多文化共生、探究学習、メディアリテラシー、さらには地域連携や小高連携などをテーマに行われる。また、NIEを大学生、社会人にもつないでいくために意見を交わす場も設ける。京都大会で盛況だったポスター発表は神戸大会でも柱の一つとし、兵庫県内のみならず全国各地からNIEのさまざまな活動やアイデアが集う。時代を読み解き命を守るために、正しい情報の収集は必須だ。

昨今、情報メディアはSNSが台頭し、新聞やテレビ、ラジオなどはオールドメディアと称されている。しかし新しい伝達手段であるSNSは、フェイク情報やフィルターバブル、エコーチェンバーなど特有の課題も多い。SNSを通じて拡散された真偽不明の情報が、社会に深刻な影響を及ぼし、情報が命を脅かす時代になっている。

片や新聞は、報道倫理に基づ

き、入念なファクトチェックや、ニュースとしての価値判断が行われたうえで記事になる。紙媒体として残る新聞はミスが許されないから、文章を校閲し、何人もの目を経て世に出る。

新聞を広げるといろいろな記事が目飛び込んでくる。新聞でさまざまな正しい情報に触れ、物事を正しく理解し判断する力が身につく。時代を正しく読み解く力が育つ。情報過多の時代、情報を正しく収集することができなければ、真偽不明の情報に翻弄され、民主主義は脅かされ、命の危険さえもある。

今こそNIEの力を再認識

子どもたちには、デジタル社会の中でメディアリテラシーを身につけ、確かな情報を基に探究を深めてほしい。混迷の時代の諸課題を解決する力、AIに支配されず自分で考え判断し行動する力、そしてたくましく生き抜く力——そんな力を育むために、新聞は大きな力を持っている。今こそNIEの力を再認識し、自信と誇りを持ってNIE活動を推進していきたい。

記事を契機に保存食づくり



前松阪市立香肌小学校 教頭 中西 祐司

「元気の出る、ジビエを使っ
たおいしい防災食をつくる」

始まりは、教頭を務めた前任
校、市立香肌小学校の6年生・
社会科の授業。災害からの復旧
復興に向けた政治の動きを学ぶ
際に、遅々として改善が進まな
い能登半島地震の避難所の状況
を伝える記事を利用した。併せ
て取り上げた2024年5月
5日付中日新聞のコラムには、
「イタリア 災害 食事」と検
索してほしい、とあった。子ど
もたちは教師が指示するまでも
なく、早速タブレット端末で検
索。イタリアの避難所では手厚
い対策が行われていることを
知り、「どうして日本でTKB
(避難生活でのトイレ・キッチン
・ベッド)を大切にすることに
できないんだ」と声を上げた。

このとき、政治に対する一時の
怒りではなく、自分事として捉
えさせたいと思った。

自分たちに何ができるか

香肌小校区と能登半島は、山
と海という大きな違いはあるも
のの、主要な道路が土砂崩れ等
の影響で寸断されれば、たちま
ち孤立してしまうという共通の
特徴がある。災害に備えて自
分たちにできることはないか、
考えさせた。話し合いは難航。
「孤立なんかしない」と考える
子もいれば、「自分たちにはで
きない」と言う子もいた。結論
は、「TKBのうち、TとBは
自分たちではどうしようもない。
それは大人に、行政をお願いし
ていく。でも、K(食事)につ
いては自分たちでもできること
はありそうだ」と、行動に移す
ことになった。
食材にジビエを取り上げたの
は、地域色を出し、香肌小の取
り組みとして広く知ってほしい

から。市内のフランス料理店に
指導を仰ぎ、メニューは鹿肉の
リエット、鹿と豚肉のソーセー
ジというジビエ・シャルキュト
リ(食肉加工品)に決定した。
いざ、実践。調理も食材もシ
ンプルだ。肉詰め機のある家庭
はそうそうないだろうが、それ
以外は、どの家庭でも手に入る
ものばかり。肉詰め用の腸もオ
ンラインで簡単に手に入った。
保存食づくりと試食会当日、

子どもたちは全校児童を前に取
り組みの意図と災害に備えた食
糧備蓄の意義を伝えた。低学年
児童にどれだけのことが伝わっ
たのかは不明だが、「おいしい
のに長持ちする肉料理がある」
ことはみんなの共通理解となっ
た。新聞やケーブルテレビにも
取り上げてもらい、活動をPR
した。保護者には防災食として
配り、災害に備える保存食づく
りという日常生活で可能な取り

組みを紹介する手紙も添えた。
後に、このことが契機となって
防災について話し合った家庭が
あったと聞いた。
子どもたちは食糧備蓄といえ
ばレトルトや乾パンばかりを想
像していたが、保存食を常備菜
として日常の中に取り入れるこ
とができると実感したようだっ
た。あとはいかに継続してい
くか。単発の取り組みに終わらせ
ない意識が肝要である。

新聞づくりで育む伝える力



石巻市立桃生中学校 教諭 志賀 優香

「大切な人の命を守るために
友達、家族、地域の人に伝えて
ほしい」

本校の生徒は、防災・減災教
育として震災遺構を見学する。
見学の最後に語り部の方が必ず
この言葉を生徒へ残す。体験あ
りきの学習ではなく、生徒が防

災・減災を自分事として考え、
学びを深める方法はないだろう
か。たどり着いたのが「防災・
減災新聞」の制作だ。

2・3年生の生徒全員が記事
を1人1本ずつ執筆し、完成し
た新聞を市総合防災訓練で地域
の方々へ配布した。さらに、生
徒は制作した新聞を基に、災害
の恐ろしさや教訓を伝える語り
部活動も行った。書いてまとめ
るだけでなく、人前で発表する
ことで、今までの学びがより深



制作した新聞を基に語り部活動を行う生徒

特集 NIEで育む防災意識

が書いた記事のどれをトップ記事にするのか、皆で話し合った。2024年度は、小学生にも新聞を配布することを踏まえ、3年生が「防災・減災こども新聞」を制作した。小学生が読んでも理解しやすいように易しい言葉を選び、写真やイラストを多くした。地域の方は、生徒

新聞でネットで防災訓練



第一関立一岩手県立第一
非常勤講師 茂庭 隆彦
高等学校

本校所在地の一関市街地は、戦後すぐの1947年と48年、立て続けに襲ったカスリン、アイオン台風により、壊滅的な洪水被害を被った。増水した磐井川は両岸の堤防を越え市街地に氾濫し、一関市周辺では死者100人を超える痛ましい災害となった。附属中学校・定時制を併設する本校は、磐井川堤防沿いの右岸に位置し、豪雨災害

が作成した新聞を熱心に読み、「災害のことを考えるきっかけとなった」「中学生とつながる機会ができてうれしい」と話していた。小学生がじつと新聞を読んでいる姿も見られ、地域全体で防災・減災について考える機会を持てたと感じる。後日、1年生は先輩の活動を手本とし、

への減災・防災の取り組みが必要な立地である。

地域の河川や豪雨災害について知るには、地方紙の記事が有効な場合が多い。2021年9月1日の防災の日に「地形、地質知り 災害に備え」の主見出しで、筆者への取材に基づいた浸水想定の一関市街地の安全避難に関する特集記事が岩手日日新聞に掲載された。市街地の過去の災害、避難が必要な降水量や河川水位、備えに不可欠なインターネット情報、身に危険が迫っている時の検索サイトなどが紹介されている。この記事が

同じく震災を経験した兵庫県中学校の生徒に向けて、「防災・減災新聞」を制作し、交流活動を行った。

「相手意識」を持ち伝える

この活動を通して、多くの生徒が「震災を詳しく知ることができたと同時に、分かりやすく

地学基礎の授業のほか、全校生徒対象の防災訓練で活用している。

導入で地方紙を有効活用

本校の水害に対する防災訓練は、豪雨における学校からの避難経路などのリスクを洗い出し、自分事として被害を最小限に抑えることを目的に行っている。以下に訓練展開を述べる。

コロナの流行で実地避難訓練を見送った21年11月に、各ホームルームで筆者の開発したワークシートに沿って担任が訓練を実施した。まず、前述の新聞記事を生徒に読ませ、地形と水の関係を考察し、危険な場所や避難先として適切な場所、避難の

伝えるためにどうすればよいか考えるようになった」と話す。相手意識を持ちながら自分の言葉で伝える力は、着々と伸びている。また、地域の防災・減災意識を高めるために自分の思いを真剣に伝える生徒の姿から、強い使命感を感じる。子どもたちの力

目安となる降水量の数値を読み取らせた。いわば新聞紙上訓練である。続いて、タブレット等で災害情報サイトも調べて活用した。国土地理院「重ねるハザードマップ」では、地形と洪水・土砂災害の関係から、本校は旧河道にあり、周辺は氾濫原で洪水リスクが大きいことを把握させた。国土交通省「浸水ナビ」で堤防決壊の浸水シミュレーションを見せ、今後のリスク対応のため気象庁「キキクル」で河川状況の把握の仕方も練習させた。23年以降は、国交省の動画「気をつけ妖怪」視聴の後「重ねるハザードマップ」で下校路のリスク調査を行わせた。その後、「氾濫危険水位に達し、

で地域を支え、変えていく教育活動を今後も繰り広げていきたい。



「防災・減災こども新聞」

市から避難指示が発令」との想定で、校舎4・5階への垂直避難訓練を実施した。教職員が備蓄品や避難先で必要となる備品を実際に準備する「持ち出し訓練」も兼ねた、より実践的な訓練となった。

水害から命を守るには、避難が肝要である。自然災害の原理を知り、情報を適切に処理して、自分事として行動する国民を育成したい。教職員、生徒が一体となって防災意識やスキル向上の育成に寄与できるこの取り組みは効果的であった。昨年は、避難所に指定されている本校の課題とその解決策について研究し、提言をまとめた1年生チームもあり、成長を実感している。

新聞とメディアリテラシー

NIE 全国大会神戸大会のテーマの一つに取り上げられたことから分かるように、教育界・報道界では「メディアリテラシー」が大きな関心を集めています。背景に選挙権年齢や成年年齢の引き下げ、また SNS が選挙に大きな影響を及ぼす昨今の状況があります。

新聞は、教室での学びと社会をつなげ、学習意欲を喚起し、社会参画意識を育む上で格好の学習材です。日本新聞協会は健全な民主主義社会の実現に向け、メディアリテラシーの重要性について積極的に発信しています。最近の代表的な取り組みをいくつかご紹介します。

第8回NIE教育フォーラム テーマはメディアリテラシー

標記フォーラムを3月1日にオンラインで開催した。テーマは「学校教育におけるメディアリテラシー」。札幌国際大学・朝倉一民教授（NIEアドバイザー）、朝日新聞東京本社・梶田育代校閲センターデスク、新聞協会・関口修司NIEコーディネーターが登壇した。セッションで梶田氏は、校閲記者の立場から、生成AIについて「インターネット上の真偽不明の情報を含む膨大なデータを機械学習した結果を出力する

ため、人間の手によるファクトチェックが必要不可欠だ」と話した。朝倉氏は「メディアリテラシーの技能を身につけるには、新聞やSNSといった情報の発信元の特性と、情報の流通の仕組みの理解が不可欠だ」と指摘。情報の質を見極める感性を育てるにはNIEタイムのような活動の継続が必要だと述べた。関口氏は「単なる知識ではない、教養と経験の蓄積を合わせたものが情報を判断する力の基盤になる」とまとめた。

ネットと選挙報道めぐり声明公表

不正確な情報によって選挙結果が左右されることが社会的に強く懸念される事態を受け、新聞協会は6月12日、「インターネットと選挙報道をめぐる声明」を公表した。メディアの報道については、「選挙の公正」を過度に意識しているとの批判に対し、選挙に関する報道・評

論の自由は公職選挙法により大幅に認められているとし、「事実立脚した報道により民主主義の維持発展に貢献することは報道機関の責務である」との姿勢を表明。有権者の判断に資する確かな情報を提供する報道を当協会の加盟各社が積極的に展開していくとした。



ウェブサイト

メディアリテラシーページ開設

NIE ウェブサイト (<http://nie.jp>) はこのほど、メディアリテラシーとNIEの関係について紹介するページをオープンした。

デジタル機器を使いこなす世代の子供たちに、多様なメディアに触れることの重要性や、健全な民主主義社会を支えるジャーナリズムの役割を伝えるためのヒントや方策を紹介。先生だけでなく、子供や保護者に役立つ情報も随時掲載していく予定。

明日も読む理由がある。

新聞科学研究所

新聞協会のPRサイト「新聞科学研究所」(<https://np-labo.com/>)は、SNSに頼った情報収集の盲点や、正確な情報を伝える新聞の価値を訴える全3回の連載を公開した。

今夏のNIE全国大会神戸大会のパネル討議にも登壇するジャーナリストの古田大輔さんのインタビュー「選挙の投票先どう決める？選挙情報の集め方3ステップと参考にした



情報源」(写真、QRコード)のほか、山本龍彦・慶応義塾大学大

学院法務研究科教授と読売新聞記者による対談、偽・誤情報があふれるSNSの危険性とメディアリテラシーの身につけ方を語った山脇岳志・スマートニュースメディア研究所所長のインタビューを掲載している。

新聞科学研究所

HOME カタログ 新聞を読みこめる このサイトについて

選挙の投票先どう決める？選挙情報の集め方3ステップと参考にした情報源



選挙の投票先どう決める？選挙情報の集め方3ステップと参考にした情報源

新聞の「今」

複雑な内容の記事を読んだとき、隣に載った図やイラストを見たらスツと頭に入ってきた——こうした経験は誰しも思い当たるはずだ。記事の理解を助ける「グラフィックス」について、意義や読者への配慮など現場の思いを寄稿いただいた。

デザインの力で分かりやすく



共同通信社 報道局
ビジュアルグラフィックス部長
酒田 英紀

新聞社や通信社にはグラフィックスを担当するデザイン部門があり、専門職のデザイナーが日夜働いている。私のいる職場は報道のお堅いイメージとかなり異なる個性的な風貌の部員が多く、赤、金、緑、ピンクと多様な髪の色、Tシャツ、短パン、モードなドレスと自由な服装が容認された、ちょっとした異空間である。

グラフィックス部には政治、経済、国際、スポーツなどあらゆる分野の取材出稿部門から、記事併用の図解、グラフ、表、地図の注文が寄せられ、それを

部員が次々に作品化していく。なにせニュースだから、フライングアートや広告デザインのようにじっくり美を追求する暇はない。スピード、正確性、分かりやすさが求められるという点は、記事もグラフィックスも同じだ。

もはや「脇役」ではない

一般的に新聞用グラフィックスの役割といえば「記事の内容を分かりやすく視覚化して読者の理解を助けること」とされる。新聞のデジタル化は、今やわざわざ口にする人もいないくらいに定着したものの、記事が主役でグラフィックスは脇役だと思っている人は多いだろう。

だが活字離れが進み、テレビすら見ない人が増えるなか、記事をじっくり読んで理解しようという読者はもはや少数と考え



共同通信社提供

るのが自然だ。朝、新聞を開いて、そこに一目で要点の分かる図解があれば、隣に載った記事は読まない、という人がいても不思議はない。

右の図解は、金額ごとに内容の異なる「年収の壁」を簡潔に示したもののだが、これをテキストで説明すると相当な文字数になる。複雑な制度の理解にこうしたグラフィックスは不可欠だし、制度を巡る議論のニュースも、一目でポイントの分かるグラフィックスがあるのとないのとでは、伝わり方がまるで違う。

ある新聞社ではグラフィックスのことを社内でも「あしらい」と呼ぶ人がいるそうだ。共同通信社でも「添えもん」という敬意を欠いた通称を使う人がいて、

私はいつもぶんぶん怒っている。グラフィックス部の名譽はともかく、ニュースへの接し方がビジュアルファーストに変質した現代において、以前はハンパに添えた赤いスパゲティのような存在だったグラフィックスは、実質的に紙面の目玉としての役割を期待されるほど存在感を増している。

制約が武器に

ニュースグラフィックスは数百万人という読者の目に触れることもあり、その表現にはさまざまな配慮が求められる。CGの技術が進み、生成AIの出現で素人が「高度にもっともらしい」画像を作ることもしやすくなったが、報道倫理を踏み越えた自由奔放なデザインは許容されない。ある意味では制約だらけの不自由な分野だ。

先ほど示した「年収の壁」の図解も、数年前はバッグを抱えた女性が岩壁を登るイラストが添えられていた。パートタイムといえど女性という固定観念を助長する表現は避けるべきで、最近では、性別を特定しない「人

物」のイラストを添える手法が定着している。

色使いにも見栄えとは別の配慮が求められる。一般的な色覚と異なる人は国内300万人以上とされ、災害ハザードマップで危険度が正確に伝わらなければ生命・安全が脅かされることにもなる。黒い背景に赤い文字列を重ねると正確に読めない人がたくさんいる。色覚多様性に配慮したカラー・ユニバーサル・デザインは、報道の分野では必須といえる。

メディアで働くデザイナーの中には、コンピュータゲームやアニメ映画など最新技術を駆使したデザインを目にして、「もっと自由がほしい」と感じる人もいるだろう。だが、報道機関として守るべきルールは、厳格に守り通さなくてはならない。フェイクやデマ、伝聞情報ばかりの「こたつ記事」や、AIが生成したやけにリアルな画像があふれる時代に、事実を事実として伝えるための制約は、逆にニュースの価値を高める武器になるはずだ。



●埼玉県
豊岡 寛行
(とよおか・ひろゆき)
①埼玉県立八潮南高等学校
②公民 ③13年
④動機づけとして社会と学
びをつなぐ活用と、学んだ見方・考え方
を用いて新聞から問題に気づき分析させ
る活用を使い分ける。



●新潟県
坂井 一
(さかい・はじめ)
①長岡市立岡南小学校
②理科 ③4年
④新聞は「今」の、「正確」
な情報であるところが強み。授業のなか
での新聞の役割を意識して活用すること
が大切である。



●富山県
市村 明恵
(いちむら・あきえ)
①富山県東部教育事務所
②中学校国語 ③1年
④社会の出来事に興味をも
ち、自分で活字を読んで理解し、他者と
意見を交流することを通して、考えを広
げたり深めたりできるようにする。



●富山県
中島 毅
(なかじま・つよし)
①富山県東部教育事務所
②小学校国語 ③1年
④新聞を通して、社会への
関心を高めるとともに、交流を通して多
様な考えに触れたり、考えを広げ、深め
たりできるようにする。



●福井県
行壽 浩司
(ぎょうじゅ・ひろかず)
①美浜町立美浜中学校
②公民 ③4年
④テレビやインターネット
など、あらゆる情報源がある中で、「新
聞記事だからこそよい」という実感を生
徒がもつことが大切。



●兵庫県
大石 昇平
(おおいし・しょうへい)
①兵庫県立洲本高等学校
②地歴公民 ③7年
④生徒が社会問題を身近に
感じられる記事を授業の導入で紹介して
いる。記事の図表を利用して資料読解力
も養えるようにしている。



●広島県
高下 千晴
(こうげ・ちはる)
①呉市立荘山田小学校
②全科 ③2年
④子供たちが自分の暮らし
を見つめ直し、よりよい社会の在り方
について考える手立ての一つとして新聞記
事を活用している。



●鳥取県
笠見 宏子
(かさみ・ひろこ)
①元琴浦町立聖郷小学校
②全科 ③15年
④身近な記事を入り口とし、
興味・関心を持たせる。多様な活動を取
り入れ、新聞のよさを伝え、社会に対す
る知識や好奇心を高める。



●鳥取県
中本 久美子
(なかもと・くみこ)
①元琴浦町立船上小学校
②国語 ③2年
④探究心、好奇心をくすぐ
る記事の精選、授業の構築。個の実践が
共通の実践そして普遍的、継続的な実践
へつながることを大切にしている。



●島根県
八波 直樹
(やつなみ・なおき)
①大田市教育委員会
②中学校英語・社会 ③5年
④私のモットーは「誰もが、
無理なく、持続可能な形で実践する」で
ある。日々のちょっとした場面で、新聞
を取り入れていきたい。



●愛媛県
幸島 恭輔
(こうじま・きょうすけ)
①愛媛大学教育学部附属小学校
②国語 ③4年
④新聞が学校生活の中に自
然に溶け込み、本やインターネットなど
と同じ一つのツールとしてなじむことが
大切である。



●愛媛県
灘野 裕子
(なだの・ゆうこ)
①松山市立久谷中学校
②社会 ③10年
④いつでも新聞が手に取れ
る環境をつくり、新聞を通して社会の
出来事とつながる楽しさを実感させる機
会を設けることが大切である。



●福岡県
田邊 謙吾
(たなべ・けんご)
①北九州市立西門司小学校
②国語 ③4年
④話し合いの題材として新
聞を活用し、多様な意見を分類・整理し、
比べ合う活動を通して、合意形成を目指
す取り組みを全校体制で行う。



●長崎県
三代 直正
(みしろ・なおまさ)
①佐世保市立春日小学校
②全科 ③3年
④子供たちにとって興味
のある出来事や身近な地域の記事から新
聞に親しみ、情報活用力や自ら考える力
を育てることが大切である。



●宮崎県
原田 俊彦
(はらだ・としひこ)
①宮崎県教育委員会義務教育課
②小学校全科 ③15年
④情報に対する自分の解釈
を明確に表す活動を取り入れること、他
者の解釈も共有し、さまざまな捉え方
があることに気付かせることが重要である。

NIE アドバイザー紹介

現在、全国で300人以上のNIEアドバイザーが活動しています。

NIEアドバイザーの名簿はNIEウェブサイト
(<https://nie.jp/teacher/advisor/>)でご覧いただけます。

- ①学校名(所属等) ②担当教科
- ③NIE実践歴
- ④新聞を活用するうえでの工夫を一言 (敬称略)



●岩手県

北向 和也

(きたむき・かずや)

- ①野田村立野田中学校
- ②社会 ③4年

④複数紙を比較し視点や表現の違いを捉えることで思考力を育てるメディアリテラシー・主権者教育や、震災報道を活用した防災・郷土学習を深めている。



●宮城県

藤坂 雄一

(ふじさか・ゆういち)

- ①石巻市立大谷地小学校
- ②全科 ③4年

④手が届くところに新聞があるという環境と、「読みながら考える」「考えながら書く」「書きながら読み深める」というスパイラルを大事にする。



●宮城県

奈須野 朱里

(なすの・あかり)

- ①栗原市立築館中学校
- ②国語 ③5年

④生徒の意欲や関心から始まる活動を意識している。もっと知りたいという気持ち、誰かに教えたいという気持ちを伸ばしていきたい。



●宮城県

森田 寿

(もりた・ひさし)

- ①尚綱学院中学校・高等学校
- ②公民 ③4年

④生成AIを使用した情報収集が探究学習でも増えるなかで、情報源として新聞記事から生きた情報を得ることを必須条件としている。



●栃木県

新美 真由

(しんみ・まゆ)

- ①佐野市立佐野小学校
- ②全科 ③3年

④児童の読解力や思考力を向上させるため、小学生新聞の活用や、複数紙の読み比べなどの新聞学習を実施している。

NIE フラッシュニュース

◇第31回全国大会広島のスローガン等、第32回仙台日程決まる
2026年7月30日、31日の両日、広島市で開催する第31回NIE全国大会広島大会のスローガンが「ニュースとであう 社会と

つながる」を育てるNIE」に決まりました。会場は平和記念公園内にある広島国際会議場です。記念講演には、広島出身で元五輪代表陸上選手島末大氏が登壇します。27年に仙台市で開催する第32回大会の日程は7月29日、30日の両日に決まりました。

◇25年度実践指定校に514校

新聞協会は、全国のNIE推進協議会から推薦された514校を2025年度NIE実践指定校に認定しました。実践期間

は原則2年間。学校のある地域で配達可能な一般日刊紙を一定期間購読できます。購読料は新聞協会と各新聞社が負担するたため、学校は無料で読むことができます。また、13道県のNIE推進協議会では新聞協会の実践指定校に加え、独自認定校として計38校を認定しました。

次年度以降のNIE実践を希望する場合は、地域のNIE推進協議会にお問い合わせください。

作品募集中!



第16回

News in Education

いっしょに読もう!

新聞コンクール

新聞協会は、気になった新聞記事について家族や友達と話し合ったうえで、感想や意見を書いて応募するコンクールの作品を募集しています。小中高校生(高専含む)が対象で、締め切りは9月8日(月)必着です。学校などの団体応募も受け付けています。ぜひ取り組んでみてください。

応募方法や過去の受賞作などの詳細はNIEウェブサイト(https://nie.jp/month/contest_newspaper/2025/)をご参照ください。





2018年。中学特進クラス

の1年生(32名)を対象に、学校予算で新聞の購読を開始した。

毎朝生徒に1部ずつ手渡し、朝の読書の時間や休み時間などに自由に読んでもらい、気になる記事の感想を100字程度で書く活動からスタート。高校までの一貫校である当校卒業後の進路を見据え、「読解力・思考力・判断力・表現力」を身につけるための取り組みである。

当初は担当教員1人が手探り状態で新聞を活用していたが、次第に実践教員も増え、教科(国語)内での取り組みへと拡

事務局長から一言

組織が一丸となって何かに取り組むのは、決して簡単ではない。それでも7年前、高知中学校がNIEに取り組みと決めた

大。これにより、全クラスの生徒が授業で新聞を読む時間を確保でき、取り組みの内容も徐々に進化した。

学校独自の新聞1面コラムプリントや「新聞ワークシート」

高知中学高等学校

教諭 森光 恵美

◎高知県高知市/校長・田村誠/生徒数・908人
◎特色・創立126年の学校法人高知学園は幼稚園から大学まで運営する県内唯一の総合学園。高知中高は「信頼される人材の育成」「社会に貢献できる人材の育成」を理念に「文武不岐」を実践し、特に中学では教育活動の3本柱の一つとしてNIEに取り組み。校章は「橘」。



【〇〇新聞】相互評価中



1人1部を使った国語の授業

「NIE冊子」など、さまざまな内容と形のシートや教材を作っては改善を繰り返した。そうして完成した冊子「Note book橘」には、記事を読んだ後の感想や取りまとめ、コラ

ム

ムの視写や感想の執筆などを盛り込み、毎日、何らかの形で新聞に触れることができる環境を構築した。

長期休みは宿題として「新聞ワークシート」3枚を必須化。学校行事ごとの振り返りにはA4サイズの用紙に「〇〇(行事名)新聞」を作り、相互評価することで、より一層「読解力・思考力・判断力・表現力」を培っている。新聞作りは4~5年前から中学校全体の取り組みへと広がり、全教員がNIEに携わるという効果ももたらしている。

地元紙・高知新聞社からは、新聞の読み方や書き方、取材の仕方についての講演など、多岐にわたる協力を受けている。それらも原動力として、さらなる意識向上に努めていきたい。

とってはさらなる活動充実への弾みになった。NIEによる好循環のサイクルは、既に始まっている。

(高知県NIE推進協議会事務局長・高本浩史)



NIEの教材になりそうな記事を探しながら新聞を読むようになって久しい。先日目に留まったのは、笑顔の女子高生たち。広島市のノートルダム清心高校放送部が、現在学校のある場所に軍需工場があった歴史を映像作品にまとめ、全国的な放送コンテストで優勝した記事だった

◆受賞作を見て驚いた。探究学習の見本のようなからだ。早速、広島県NIE推進協議会の学習会に招き、作品について語ってもらった◆彼女たちは、当時の手記から生徒動員された被爆者を探してインタビューするなど、丁寧に取材を重ねていた。「数珠つなぎのように取材が広がって楽しかった」◆自ら課題を見つけ、調べ、まとめる探究学習は、新聞記者の取材活動とよく似ている。ならば、記者のノウハウを学校に伝えれば探究学習の手助けになるはず。

NIEの新しい柱として力を入れたい。(中国新聞社・伊藤一巨)